20世紀初頭におけるアメリカの政治・外交と ヘンリー・スティムソン

中　沢　志　保*

U.S. Politics and Diplomacy in the Early Twentieth Century and Henry L. Stimson

Shiho Nakazawa

要　　旨　本稿は，20世紀初頭におけるアメリカの政治・外交とヘンリー・スティムソン（Henry L. Stimson）の立場を考察するものである。スティムソンは，陸軍長官，植民地総督，国務長官などの立場で，20世紀前半期におけるアメリカの主要な対外政策に直接関与した。また，第二次大戦中の原爆の開発と投下決定においては圧倒的な存在感を持った高官として知られる。しかし，半世紀近いスティムソンの公職生活がアメリカの対外政策に与えた影響を検証する作業が，国際関係学やアメリカ史の分野において十分になされてきたとは言い難い。筆者は，国際関係学の視点から，スティムソンの全生涯を考察しつつアメリカの政治・外交の諸特徴を再検討する作業に着手した。したがって，本稿は一連の「スティムソン研究」の一部となる。

キーワード　ヘンリー・スティムソン　　20世紀初頭　　アメリカ政治

I　はじめに

19世紀末の米西戦争[1)]を契機に列強諸国の仲間入りを果たしたアメリカは，それ以降の半世紀ほどの間に，常に国際関係の表舞台に登場する大国としての地位を獲得した。この時期において，６人の大統領の下で働き，現在のアメリカの政治・外交の基盤の形成におおいに貢献した人物が，ヘンリー・スティムソン（Henry L. Stimson）である。彼は，第26代大統領セオドア・ローズヴェルト（Theodore Roosevelt，以下，T.ローズヴェルトと記す）の下で，同大統領が目指した大胆な改革政策である反トラストと汚職追放の推進役を務め，タフト（William H. Taft）第27代大統領の閣僚（陸軍長官）として，陸軍省の改革を断行した。クーリッジ（Calvin Coolidge，第30代大統領）政権下では，ニカラグア特使やフィリピン総督などといった立場で植民地政策を担い，フーヴァー（Herbert Hoover）第31代大統領の国務長官として，1920年代から30年代初頭のアメリカ外交を形作った。第二次大戦中，第32代大統領のフランクリン・ローズヴェルト（Franklin D. Roosevelt，以下，FDRと記す）に陸軍長官としての入閣を請われ，戦争の遂行と戦後処理の準備における中心的責任者となった。FDR急死後のトルーマン（Harry S. Truman）

* 本学教授　国際関係学

政権下では，戦争の終結に向けた諸政策の決定に直接関与した。特に，原爆の投下決定においては圧倒的な発言力を持ち，核兵器がもつ特異な性格と脅威に最初に気づいた政治家とも称される。その意味において，スティムソンはアメリカの初期核政策の研究において最も注目すべき人物の一人と言える。

スティムソンはまた，半世紀近い公職生活の中で，後に「スティムソン組（Stimson's Kindergarten）」[2] あるいは「賢人たち（the Wise Men）」[3] と呼ばれる頭脳集団を育成した。スティムソンを父のように慕うこのグループのメンバーには，スティムソンとの共通点がいくつかある。彼らは，ハーヴァード，イェール，プリンストンといった東部私立大学あるいはロースクールの出身者で，基本的には共和党支持者であった。さらに，弁護士や金融家でありながら，高い理念と公平無私の立場で政府高官の職に臨み，共和，民主両政権から高い政治能力を評価された人材である。また彼らは，「自由と民主主義」の国アメリカが国際社会で指導力を発揮すべきであるという点において揺らぎのない信念を持ち続けた。第二次大戦中，陸軍次官補としてスティムソンの補佐役を務め，戦後初期に国務次官補，国防長官を歴任したロヴェット（Robert A. Lovett），同じく第二次大戦中にスティムソンに見出されて陸軍次官補を務め，戦後は世銀総裁に就任するマックロイ（John J. McCloy），「トルーマン・ドクトリン」[4]，「マーシャル・プラン」[5] といった政策の中心的な立案者で，アメリカの冷戦初期における外交を形成したアチソン(Dean G. Acheson)，第二次大戦中，ソ連大使という立場で米ソ両政府間の連絡・調整役を務めたハリマン（W. Averell Harriman），終生影のようにスティムソンに寄り添い（FDR政権下では執務室も隣），政策顧問の立場で彼を支えたハーヴェイ・バンディ（Harvey Bundy，以下，H. バンディと記す），彼の息子でスティムソン回顧録の共同執筆者でもあるマックジョージ・バンディ（McGeorge Bundy，以下，M. バンディと記す）などがこの集団の主要メンバーである。大統領と陸軍長官（国防長官）が一元的な指揮権をもつアメリカ軍部は，後述するようにスティムソンらが作り上げたものであり，今日のアメリカの対外政策が，同国が海外進出を開始した20世紀初頭の特徴を依然として色濃く備えていることを考えると，軍事力の行使あるいはその可能性を背景におく現在のアメリカ政治・外交の基盤は，スティムソンおよび彼の「弟子」たちによって形成されたと言っても過言ではないだろう。

アメリカの初期核政策を研究テーマのひとつに選ぶ筆者にとって，スティムソンは当然のことながら重要な研究対象となる。また，半世紀近いスティムソンの公職生活を詳細に追うことによって，現代アメリカの政治・外交における諸特徴を確認することも可能であると考える。本稿では特に，彼の長い公職生活の出発点とも呼べる20世紀初頭の時期を扱う。具体的には，彼の価値観を形成したと考えられる家庭環境と教育内容を確認し，政治家としての基礎を築いた連邦検事時代とタフト政権下での陸軍長官時代を分析する。加えて，第一次大戦時におけるスティムソンの特異な行動（50歳直前での従軍）をとりあげ，それが彼の戦争観や国際政治認識とどう関わっていったかを検証したい。

本論に入る前に，本稿が依拠する主要文献について説明しておきたい。第一に挙げられるのは，『スティムソン日記』[6] である。彼の公職生活の全期間における日々を描き出しているこの日記

は，スティムソン研究において不可欠の一次資料である。また，スティムソンがM.バンディの補助を得て生前に残した回顧録[7]も有益な一次資料となる。主たる二次資料としては，『核の悲劇――ヘンリー・L.スティムソンと原爆の対日投下決定』[8]と『陸軍大佐――ヘンリー・スティムソンの生涯と戦争』[9]のふたつが，信頼に足る資料で裏づけされたスティムソン研究として特に評価できる。

『核の悲劇』は，原爆投下決定の研究における第一人者であるバーンスタイン[10]（Barton J. Bernstein）の指導下で完成したマローイ（Sean L. Malloy）の博士論文が土台となっている研究書である。マローイの研究は，著書名からも分かるように，原爆の投下決定におけるスティムソンの役割を再検討することに主眼点を置いている。マローイはまた，従来のスティムソン研究において手薄な部分を補うことも試みている。1920年代から30年代初頭におけるスティムソンの海軍軍縮政策への関与である。マローイは，スティムソンが示した一見対照的に見える姿勢――軍縮への熱い思いと原爆投下に代表される戦争遂行の強硬な姿勢――がどのように形成されたかを検証する。

ホジソン（Godfrey Hodgson）の『陸軍大佐』における最大の特徴は，スティムソンの全生涯を描きだしつつ，彼の行動の背景にある思想を分析している点であろう。ホジソンは，父方，母方双方の家系，スティムソン一族の宗教である長老派教会の信仰，彼が受けた典型的なエリート教育，スティムソン自身が生き方の手本とみなしていた人物，などから彼の人格や行動を考察する。そして，それが連邦検事，植民地総督，陸軍長官，国務長官といった職務の遂行といかに関係していたかを説明する。古典的とも思えるような倫理観をもつスティムソンが，なぜ原爆投下を容認し得たかという疑問を解明しようとしている点では，マローイの研究と重なる部分もある。筆者は，両者に代表される先行研究を踏まえ，また一次資料を吟味し直しながら，スティムソンとアメリカの対外政策における特徴との関係を国際関係学の視点から再検討する。

Ⅱ　スティムソンの人物像

現代アメリカの政治・外交の基盤を作り上げたスティムソンはどのような価値観と世界観を抱く人物であったのだろう。彼のプロフィールに関しては，筆者の別の研究[11]を参照していただくとして，本節では，スティムソンの生い立ち，受けた教育，影響を受けた人物，の3点に焦点を当てる。それらが彼の価値観を形作った主要因と考えられるからである[12]。

1）生い立ち

スティムソンは，1867年9月21日ニューヨークで，彼自身の表現によると「屈強で信心深く，質素ながら長寿の血筋をもつ中産階級」[13]の家庭に生まれた。父ルイス（Lewis A. Stimson）は，イェール大学出身のブローカーで，後に大学勤務の医者に転身した。ルイスは，同じくニューイングランド出身のキャンデイス（Candace Wheeler）と1866年に結婚し，一男一女を儲けた。母親と同じ名前をもつ妹が生まれた直後から，母キャンデイスは糖尿病を患い，このことがルイスをして医学者への道を歩ませたと思われる。最先端の医学の修得と最良の治療を求めて，1871

年に家族ともどもヨーロッパに渡ったルイスにとって，キャンデイスの死（1876年）の衝撃はことのほか大きかったようである。幼くして母を失ったスティムソンは，妹のキャンデイスとともに父方の祖父母の家で育った。スティムソン一族の大勢の大人たちに守られるようにして育てられたわけであるが，特に未婚の叔母ミニィ（Minnie Stimson）には母に対するような愛情を抱き，スティムソンは生涯にわたってこの叔母との交流を大切にした。

ホジソンは前述の著書の中で，母の死と父の育児放棄が幼いスティムソンに与えた影響は大きく，この二重のショックが「無口で禁欲的な性格」[14] を形成したと述べている。ホジソンのこの解釈を否定するつもりはないが，スティムソンが生涯暖かな家庭への思いを強くもっていたことは『日記』などで確認できる。このあたりは後述する。

2）教育

フィリップス・アカデミー（Phillips Academy），イェール大学，ハーヴァード・ロースクールというスティムソンが進んだコースは，当時のアメリカ上流階級の典型的な教育であったと考えられる。

13歳になったスティムソン少年は，マサチューセッツ州のアンドーヴァー（Andover）にある全寮制・私立の教育機関フィリップス・アカデミー（その所在地の名称から「アンドーヴァー」あるいは「フィリップス・アンドーヴァー」とも呼ばれる）に入学し，17歳まで在籍した。1778年創立のアンドーヴァーは，聖書，ラテン語，およびギリシア語を徹底的に教え込む教育方針をもち，イェール大学への進学者を多く送り出した。当時「ユニテリアン」の色合いが濃いとされたハーヴァード大学に対しては，批判的な立場をとっていたらしい。スティムソンが在籍していた頃，この学園にはまだバスタブ，シャワーなどの施設が完備されておらず，少年たちは身の回りのことはすべて自分で行うよう躾けられた。視野は若干狭く保守的な教育機関であったと考えられるが，スティムソンはこの学園でよく学び，自然と親しむアウトドアの楽しみも覚えた。

イェール大学への入学は，アンドーヴァー卒業後１年間をおいての1884年である。1883年にアンドーヴァーを卒業したスティムソンは，父，妹とともにフランスでしばらく過ごした後，ニューヨークと母校で数ヶ月大学進学のための準備に専念した。スティムソンが進学した19世紀末の時期は，アメリカの大学教育の改革期にあたる。イェール大学においても，選択科目が設置されたのはスティムソンが入学する直前のことで，彼が３年になった年に，イェールは「単科大学（college）」から「総合大学（university）」に変わった。近代的な教育機関となりつつあった同大学で，スティミー（Stimmy）という愛称で呼ばれていたスティムソンは，学問のほか，キャンプ，登山，狩猟などのアウトドアの趣味を深めた。彼の活動的な趣味は生涯続き，最晩年においても車椅子で狩猟を楽しんだようである。

大学時代のスティムソンに関して特に明記すべきことは，彼が上級生の秘密組織である「スカル・アンド・ボーンズ（Skull and Bones）」のメンバーとして活動していた点であろう。極めて有名なこのサークルからは，アメリカの政財界や学会等で活躍する人材が多く輩出されている。ここで培われた愛校心や仲間意識は，後年アメリカの上流社会のなかで強い人脈を形成する素地

を作るのである[15]。

大学の4年次生の時にスティムソンは生涯の伴侶となる女性と出合った。ニューヘヴン市の初代市長シャーマン（Roger Sherman）の血筋を引くメイベル（Mabel W. White）である。息子の最高位への立身出世を望んだ父ルイスは，さらに条件の良い結婚相手を選ぶため，二人の婚約に強く反対したといわれている。父の反対を押し切り，生活の基盤を作ったスティムソンがメイベルと結婚したのは，婚約から5年後の1893年7月のことである。

イェール大学を卒業後，1888年ハーヴァード・ロースクールに進学したスティムソンは，1890年に弁護士の資格を取得した。弁護士となった息子を，父ルイスは投資家である友人ウィットニー（William C. Whitney）を介して，ニューヨークの法律家ルート（Elihu Root）の事務所に送り込んだ。後述するように，ルートとのこの出合いがなかったらその後のスティムソンの公職生活はあり得なかった。ルートはスティムソンのロールモデルとなっていくのである。見習い期間を終え，1893年1月にルート法律事務所の正弁護士となったスティムソンは，前述のように同年7月メイベルと結婚した。

3）二人の「ロールモデル」

スティムソンが自身の進路を決定するときに，まるで人生の「模範」のように彼に大きな影響を与えた人物が何人かいる。特に重要な人物が，弁護士事務所の上司であったルートと第26代大統領のT．ローズヴェルトのふたりである。

すでに述べたように，ルートは弁護士になったばかりのスティムソンが勤めた法律事務所の経営者であった。1899年，ルートは経営状況が安定したこの法律事務所をスティムソンとウィンスロップ（Bronson Winthrop，スティムソンと同時期にこの法律事務所に入り，生涯法律家としての人生を送った）に任せて，自らは陸軍長官（マッキンレー政権）への道を歩んだ。ルートはその後，T．ローズヴェルト政権下で国務長官となり，同政権の改革を進める傍ら，戦争による紛争解決を防止するための国際裁判所の創設に奔走した。また，改革政策の実行部隊的な役割をスティムソンに任せるように同大統領に進言したのもこのルートである。つまり，スティムソンが公職に就くきっかけを作ったのがルートなのである。

法律家でありながら利益の上がる事務所を経営することなく，公益のための仕事を選び，陸軍長官，国務長官を歴任し，周囲から尊敬を集める政治家となったルートは，スティムソンの生き方とそのまま重なる。1908年イェール大学の同窓会でのスティムソンのスピーチは，この点を端的に物語っている。

> 大企業の経営者などをクライアントに持つニューヨークの弁護士は，「金儲けが一番大事」というタイプの人間になる。一握りの人間の私益――それがたとえ公益と合致しなくても――を守ることが求められるからである。自分は公職を得たとき，暗い場所から抜け出て星を見つけたかのような感覚を覚えた。生まれ変わったように感じたのである。自分の仕事が何か（something）につながっている。人間は良い目標（good cause）のために

働いていると感じた時，必ず良い感情を得るものだ[16]。

スティムソンや彼の後継者たちに共通する公職への高い使命感は，基本的には彼らの価値観や倫理観に由来するものであろう。しかし，高い収益を上げる法律事務所を躊躇なく手放して，政府高官への道を歩んだルートの「先輩」としての存在も大きく影響していたと考える方が自然である。

しかし，スティムソンが尊敬したルートは，帝国主義的な植民地政策を推し進めた人物でもあった。T.ローズヴェルト政権の国務長官として，20世紀初頭のアメリカ外交を担当する立場にあったルートは，中南米地域やフィリピンなどへの積極的な介入を容認した。例えば，スペインからの独立を果たしたキューバを保護国としてアメリカの支配下に組み入れる政策を具体化し，キューバ憲法の中にアメリカの介入を容認するいわゆる「プラット修正条項」[17] を盛り込んだ。同様に，当時のヨーロッパ列強諸国と同等の立場をとる必要を認識したルートは，フィリピンにおける植民地政策も積極的に推し進めた。秩序と前例を重んじ，資本主義的経済を擁護する典型的なアメリカ保守派であるルートは，同時に典型的な帝国主義者であったと言える。スティムソンが，ルートのこのような政治認識をそのまま無批判に継承していたとは思わないが，多くの点で両者が互いに共感を覚えていたことは確かである。

青年スティムソンにとって，第26代大統領のT.ローズヴェルトが二人目のロールモデルになったと思われる。両者は，ともに富裕なニューヨークの家庭に生まれ，アイヴィー・リーグでの教育を受けた。また，西部への冒険的な旅[18]，山登り，狩猟などの活動的な趣味を共有し，両者の間には出会いの段階から親密な交流を確認できる。スティムソンは，公職に就く前（1903年）にロングアイランドのハイホールド（Highhold）[19] に100エーカーの土地を購入し，そこに馬小屋，干草納屋，風車，大麦とコーンの畑，などを備えた別荘を建てていた。乗馬や狩猟を毎週末のように楽しむためである。後年，T.ローズヴェルトはこの別荘に招かれる常連客のひとりになっていくのである。

T.ローズヴェルトは，国内においては革新的な政治改革に着手し，対外政策においては軍事力を背景に海外に進出する，いわゆる「棍棒外交」[20] を展開した大統領として知られる。今日のアメリカの政治・外交の起源を20世紀初頭のT.ローズヴェルト政権に見出すことができると言ってもいいかもしれない。

同政権の国内改革の要は，トラスト防止と汚職の追放であった。しかし大統領といえども，資本主義経済の屋台骨を構築しつつあった大企業の経営方針に意義を唱え，その不正行為を追及するのは並大抵のことではなかった。次節で述べるように，T.ローズヴェルト政権が発足当初，実際にトラスト取締りに成功したのはわずか数例で，同政権は忠実に改革を実行するスタッフを確保する必要に迫られたのである。スティムソンがこの役割を期待された若手として，ルートを介して連邦検事に起用されたのは，このような事情による。

1898年の米西戦争勃発時に，自ら「荒くれ騎馬隊（Rough Riders）」[21] を率いて戦いに参加したT.ローズヴェルト（当時，海軍次官）に対して，スティムソンは憧れに近い尊敬の念を抱い

ていたという。彼が，Ｔ.ローズヴェルトと同様に，中南米や太平洋地域においてアメリカが指導者としての役割を発揮することを当然のことと認識していたからである。つまり，スティムソンも帝国主義時代の政治家としての発想から逃れられなかったわけである。ただし，好戦的なＴ.ローズヴェルトと比べて，スティムソンの帝国主義的姿勢には綿密な分析が加えられる必要がある。

この点に関しては，前述のマローイの研究が参考になる。マローイは，明白な帝国主義者であったルートやＴ.ローズヴェルトと比べ，スティムソンにはアメリカの国益のために植民地は本当に必要なのかを問う冷静な姿勢が常にあったと述べる。例えば，米西戦争終結直後において，スペインから譲り受けたフィリピンを領有し続けることにスティムソンは疑念を持っていた。典型的な白人優越主義者であったスティムソンが，劣性人種の国とみなしていたフィリピンを領有することで，アメリカ人が「堕落」することを恐れたためとマローイは分析する。そのスティムソンが1911年にタフト政権下で陸軍長官になると，姿勢を一変させる。ヨーロッパ列強が世界各地に植民地を拡大していく中で，アメリカも海外での拠点を持つことで対抗しなくては国益を守れないと判断したためであるとマローイは述べる。それゆえその後，スティムソンは，パナマ，キューバ，ドミニカなどの中米地域やフィリピンでのアメリカの排他的な権限を容認したのである。スティムソンのこの帝国主義的な姿勢は，1920年代末に再び変化する。1928年から翌年にかけて，フィリピン総督として植民地政策に直接携わったスティムソンは，力で押さえ込む帝国主義的外交の限界を認識し始めたからであるとマローイは説明する[22)]。

スティムソンの外交方針は，マローイの指摘するように国際環境や時代に対応してめまぐるしく変化することがある。第二次大戦中の対ソ外交においても，米ソ間の交渉を重視するケースと，逆に警戒心から対ソ交渉を控える姿勢の両方の立場をスティムソンに確認できる。しかし，これらにみられる表面的な変化にとらわれすぎてはならないと筆者は考える。スティムソンが，アメリカの国益を第一義的に考える点においては全くぶれることがなかったからである。国益を真に守ろうとするからこそ，時に急激に変化する状況に柔軟に対応する必要を認識したのではないか。

以上のように，スティムソンの生い立ち，教育，「ロールモデル」を考察してみると，彼の人物像のようなものが浮かび上がってくる。まず，厳格で家父長的なピューリタンの家庭で育てられたスティムソンが，規律と倫理を重んずる父親的な存在感を持つ政治家になったことが指摘できる。次に，家庭環境や教育で培われたエリート主義は，責任を自覚し社会の中で指導的な役割を発揮する姿勢を形成したと考えられる。また，前例，秩序，資本主義経済といった概念を肯定するという意味で，基本的には保守主義者であったが，革新的な改革を推し進めたという意味においては，古典的な保守主義者とは異なる資質を備えていたとも言える。さらに，アメリカが世界の指導者たる地位を獲得すべきであるという点において，疑問を抱くことのなかった人物であったことも間違いなく指摘できるだろう。

Ⅲ　革新政治の進展とスティムソン

本節では，スティムソンの最初の公職である連邦検事の活動と，タフト政権下での陸軍改革を

扱う。

1）連邦検事として[23]

「公正な取引を（Square Deal）」というスローガンを唱えたT.ローズヴェルトは，その勇猛果敢な持ち味を発揮し，反トラスト法や鉄道会社などのリベートを禁止したエルキンズ法を発動して，大企業に対する政府の監督を強化した。1904年の「ノーザン・セキュリティーズ（Northern Securities）会社」の解散は，反トラスト法を適用した典型的な改革事例であった[24]。しかし前節でも触れたように，トラスト防止と汚職追放をめざす同政権の革新的な国内改革は，既得権益を守ろうとする資本家たちの反感を買い，挫折寸前の状況を迎えていた。特に1903年に制定されたエルキンズ法を適用できた判例が，その後の2年間一件も存在せず，T.ローズヴェルト大統領は，自身の改革路線を現場で実施する法律家を強く求めていた。同大統領が「私のタイプの人材」[25]と白羽の矢を立てたのが，ルート国務長官が推薦するスティムソンだったのである。

1905年12月，スティムソンはかつての上司であるルートに呼ばれ，ホワイトハウスのT.ローズヴェルトを訪ねた。スティムソン，ルート，T.ローズヴェルトの三者での会談において，スティムソンは大統領からニューヨーク州南部地域の連邦検事（Attorney）への就任を打診された。アメリカ国内の最も重要な地域における法律の執行者の立場を与えられたのである。

1906年2月，スティムソンは正式に連邦検事に就任した。スティムソンに与えられた任務は，連邦法違反者（特に大企業の違反）を罰することであった。この任務を遂行するに当たって，スティムソンは第一に，ファイルシステム，カードインデックス，審理予定表，といった方式を採用して事務の近代化に努めた。また，おもにロースクールを終えたばかりの有能な若者を集め，徹底的な専門家集団に育て上げた。選りすぐりの若手を見出し，それぞれの才能を開花させながら優れた専門家集団を形成する手法は，第二次世界大戦時の陸軍長官時代にも導入されることになる。ちなみに，連邦検事時代のスティムソンの年収は1万ドル，アシスタント8名の合計年収は2万2000ドルであったという。スティムソンとアシスタントの年収を合計しても，ニューヨークの法律家の一人分にも満たない金額だったようである。スティムソンが言う「お金より何かの役に立つ仕事」の意味が想像できそうである。

連邦検事在任中の摘発で特に注目されたのが，「アメリカ砂糖精製会社（the American Sugar Refining Company）」と「ニューヨークセントラル鉄道（the New York Central Railroad）」に対する告発である。どちらもリベートを禁止したエルキンズ法違反の事例であった。

1909年の4月までの3年間，連邦検事としてT.ローズヴェルトの改革路線を補佐したスティムソンは，企業や役所で不正行為や汚職が蔓延する状況を直視する立場にいたわけである。この経験から彼が得た教訓がいくつかある。第一の教訓は，企業や役所の不正自体も問題だが，それを防止できない政府の無為無策の方が深刻な問題であるという点である。第二の教訓として，政府の対応策でまず必要なことは，違反とそれに対する処罰を「公開」することだと認識した。ここに彼のモットーのひとつが生まれた。すなわち「正義は有効に公平に執行されなければならない」[26]のである。

2）陸軍改革[27)]

T.ローズヴェルトの後を引き継いだタフト大統領は，党派を超えて支持されるスティムソンの中庸性を評価し，上院議員となったルートを通じて，陸軍長官のポストを提示した。スティムソンは，陸軍長官の職務を引き受ける前に4人に相談した。妻メイベル，父，弁護士事務所の同僚であるウィンスロップ，そしてT.ローズヴェルトである。正式な就任は，1911年5月のことである。

アメリカが軍隊の組織化を進めたのは，南北戦争が終わってから第一次世界大戦期にかけての時期である。1866年に工兵学校（Engineer School），1868年に砲兵学校（Artillery School），1881年に歩兵・騎兵学校（infantry and cavalry school），1901年に陸軍大学（Army War College）等の軍事教育機関が創設され，主として国境警備と対インディアン戦争に備えるための軍人が養成された。しかし，列強諸国が競って植民地の獲得に邁進した帝国主義時代を迎えると，アメリカはそれらの国々に対抗するためには，緊急に軍隊を近代化しなければならないことを認識するようになった。そうはいっても，1911年当時の陸軍はまだ，4,388人の将校と70,250人の下士官という小規模の軍隊であった。また，陸軍長官の権限は小さく，陸軍内部では，旧式な軍隊を維持しようとするグループと改革派との間で分裂さえみられたという。他国の追随を許さないほどの圧倒的な規模をもち，完全に組織化された現在のアメリカ軍からは想像できない状況であった。スティムソンが陸軍長官に就任したのはこのような時期においてである。

スティムソン陸軍長官は，着任後すぐに陸軍内部に二人の実力者のいることを察知した。ひとりは，当時陸軍の参謀本部議長を務めていたウッド（Leonard Wood）である。軍医出身のウッドは，T.ローズヴェルトの友人でもあり，米西戦争においては「荒くれ騎馬隊」を指揮した実戦型の軍人であった。スティムソンが最も尊敬した軍人の一人であったといわれ，後年フィリピン総督となったウッドが現地の実力者と対立したときに，スティムソンは一貫してウッド支持の立場をとった。乗馬や狩猟などの趣味を共有したこともあって，スティムソンとウッドはたいそう「気の会う」者同士であったようで，ルートが陸軍長官時代に設置した参謀本部（the General Staff）を死守し，陸軍改革をさらに進めることにおいても緊密な協力体制をとった。

もう一人の実力者は，ウッドとは対照的な人物のエインズワース（Fred C. Ainsworth）少将である。連邦議員との強力なコネを持つエインズワースは，行政能力と政治力でのし上がったような人物で，ルートやウッドが進める陸軍改革に猛反発していた。当然，参謀本部の存在にも否定的であったエインズワースは，スティムソンが陸軍長官に就任する前に，ウッドを排除した上で将校レベルの部局を作り，そこに陸軍の権限を集中させるよう画策していた。陸軍長官に就任する前から，スティムソンとエインズワースの対決は始まっていたとも考えられよう。

このようなわけで，スティムソンの陸軍改革は，エインズワースを排除することから始まった。1911年末，前述のエインズワースが設置した部局は，陸軍兵士の最も基本的な記録である点呼名簿（muster roll）の廃止を勧告する少数意見を報告書にまとめた。この斬新な廃止勧告はスティムソンとウッドの支持を得た。両者は，改革推進のために新方式の導入に積極的であったためである。ところが，反改革の姿勢を硬化しつつあったエインズワースは，1912年2月，点呼名簿廃

止に強く反対する覚書をウッドに提出した。スティムソンはこの時，あくまでもスティムソンとウッドに不服従の立場をとるエインズワースに対し，決定的な措置をとる決心を固めた。スティムソンは，法律の許す範囲でどのような反撃が可能かについて，軍法務官のクローダー（Enoch Crowder）と事前に話し合った。クローダーは，行政面での懲罰と軍法会議にかける方法の二つの方法を提示した。躊躇なく後者の軍法会議を選ぶスティムソンにクローダー法務官は驚きを隠さなかった。仰天するクローダーにスティムソンは「打撃を加えるとき，私は小さな銃ではなく大きな銃を使う」[28] と答えたという。良識派で知られるスティムソンの別の側面を見る思いである。前後の思慮のないままに攻撃的になることはまずなかったが，攻撃せざると得ないと判断した場合は容赦ない手段を駆使するというタイプであろうか。「愛されるより恐れられる者になれ」というマキアヴェリの名言を実践するかのようなスティムソンの行動である。

スティムソンの決意を知ったクローダーは，告訴状の作成と裁判官の選定作業を開始した。スティムソンはまた，エインズワースを軍法会議にかけるつもりである旨をタフト大統領とルート上院議員（前陸軍長官）に伝え，両者からの了解を得た。同時に軍法会議に備えて，全国の退役将校に証言を依頼する電報を打った。万全な形で（スティムソン流に言えば「大きな銃」で）エインズワースを迎え撃つ準備を整えるスティムソンのもとに，エインズワースの辞任表明のニュースが届いた。スティムソンはしかし，謝罪をせずに辞任しようとするエインズワースを陸軍長官として許すわけにはいかなかった。さすがに軍法会議にかける措置はとらなかったが，エインズワースは「辞任」ではなく「解任」の形で陸軍を去ったのである。

スティムソン陸軍長官とウッド参謀の陸軍改革は，エインズワースを解任したことで多少スムーズにはなったようである。しかし陸軍への予算配分の決定権をもつ議会との交渉は難航を極めた。また，議会との強力なコネをもつ官僚型の軍人であったエインズワースを排除したことで，ますます陸軍に対する議会の締め付けは厳しくなった。たとえば，議会は陸軍の予算案を認める代わりに，ウッドを参謀からはずす内容の追加条項をその予算案に入れようとした。スティムソンはこれに対抗し，タフト大統領に拒否権を行使させた上で，議会に追加条項をはずさせた。彼はこのとき，議会対策における教訓を得たと自らの回顧録に書いている。「不当な追加条項には大統領の拒否権で対応せよ。あるいは，法案全体を廃案にしたうえで，世論に訴えよ」[29]。

陸軍は1912年には，歩兵隊，騎馬隊，砲兵隊，沿岸砲兵隊，の 4 部門が設置され，各部門各地域の上級将校の下に編成された。アメリカ史上初めて，この時点で政府からのひとつの指令で全体が動く軍隊組織となったのである。エインズワースや議会の一部がスティムソンらの陸軍改革に反対した背景には，単なる政治闘争だけでなく，軍事面でも中央集権化を嫌うアメリカの歴史的な状況が存在していたのではないかと筆者は考える。州の民兵組織が中央政府に実力で対抗できる手段を憲法に盛り込んだ（憲法修正第 2 条）[30] ことからも分かるように，「ひとつの指令」で全国の軍隊が動くこと自体に対する警戒心が建国の当初から存在する国なのである。1913年，メキシコとの国境で警戒態勢に入ったとき，スティムソンらによる陸軍改革の「成果」が早速確認された。ワシントンからの命令ひとつで，テキサス州の現地に陸軍師団が直ちに形成されたのである。改革前であれば，同じ師団を作るために数百の指令が必要であったといわれる。スティ

ムソンは「アメリカの軍隊は50年の眠りから覚めた状況」[31] と若干自画自賛的な自己評価を残している。

Ⅳ　第一次世界大戦とスティムソンの入隊

19世紀から20世紀への世紀転換期において，アメリカは内政，外交の両面で大きな変化をとげた。「金ぴか時代」[32] とも称される南北戦争（1861〜1865）後の急速な経済発展期を経て，アメリカは独占的金融資本や企業合同（トラスト）といった典型的な資本主義社会の特徴を露呈させていた。またすでに述べたように，米西戦争以降，アメリカはキューバやフィリピンを保護国化ないし植民地化し，ヨーロッパ列強の帝国主義政策に対抗した。中国に関しては，列強諸国の対中関係における機会均等を確保すべく，門戸開放政策[33] を主張した。つまり，アメリカはこの時期，先進工業国としての経済力と海外進出に伴う国際社会での地位の両方を獲得しつつあった。アメリカが西半球の新興国から世界最強の国へと変わっていくまさにその時期である。

国際社会での圧倒的な存在感をアピールし始めたアメリカが，第一次世界大戦と無関係でいることはもはや不可能になった。しかし，大戦が勃発した段階では，ヨーロッパの戦争に巻き込まれたくないとする孤立主義的な立場が世論を支配していた。ウィルソン（Woodrow Wilson）民主党政権下[34] では公職に就くことのないスティムソンであったが，彼も1914年の大戦勃発当時においては，同政権の中立政策を支持していた。英国客船ルシタニア号がドイツの攻撃を受けた事件の後でも，スティムソンの中立支持の立場は変わっていない。1915年６月ごろからドイツを批判する発言を始めるが中立政策への姿勢に変化はない[35]。

ドイツによる無差別攻撃がエスカレートする1917年に入ると，スティムソンの言動に大きな変化が生じた。スティムソンは「中立の権利」を明言しなくなったのである。また，それまでのウィルソン政権に対する静観という姿勢にも変化が生じた。スティムソンは，「嵐の中の舵取りは共和党の方が得意である」と述べ，「ウィルソン政権の戦争準備は不充分である」と同政権に対し明らかに批判的な立場をとるようになった。しかし，直ちに参戦支持の立場をとったわけではない。前政権で陸軍長官を務めたスティムソンは，アメリカ軍がヨーロッパ諸国の軍隊と比べまだ脆弱な存在であることを認識していたためである。スティムソンが1917年初頭に，スイス型の軍事訓練を念頭に置いた徴兵制（conscription）を主張し始めたのはこのような背景があったと考えられる。そして，彼は同年１月，「主たる脅威は個人の自由を否定する国々から来る」と戦争を膨張主義政策の道具と考えるドイツを非難し，そのドイツと対決することの意味を「単にドイツと戦うのではない。自由主義のために戦うのだ」と明言するに至った。このときのスティムソンの表現は，参戦承認を求める議会でのウィルソン演説（通称「ウォー・メッセージ」：1917年４月）[36] と酷似している。スティムソンの言動が共和・民主両派から常に注目されていたことをうかがわせる事例でもある[37]。

「自由と民主主義のために戦う」というスティムソンやウィルソンの表現は，アメリカの対外政策において，時代や状況を越えて応用される可能性を残した。第二次世界大戦への参戦であれ，その後に展開された数々の軍事介入であれ，「自由と民主主義」がアメリカが自らの軍事行動を

説明する際に用いた最も一般的な表現であることは周知の通りである[38]。しかし，スティムソンやウィルソンが理念として掲げた「自由と民主主義」と，節度のない軍事力の行使を正当化するための「自由と民主主義」表現とは質的な違いがあるように思う。このあたりは今後の研究で考察したい。

1917年５月，スティムソンは誰もが驚く行動に移った。49歳での陸軍への入隊である。法律事務所でのパートナーであったウィンスロップなどは「その年で軍役に就くなどばかげている。陸軍ではなく保養地に行くべきだ」[39] と助言していたらしい。50歳を間近に控えての入隊の理由を，スティムソンは回顧録で「第一次世界大戦におけるアメリカの役割は資金と物資の補給だけだとする者を批判し，戦闘への参加が必要だと主張した自分がシビリアンのままでいることはできなかった」[40] と説明している。また，「（T．ローズヴェルトやウッドのように）米西戦争に参加しなかったことを20年近くも後悔していたし，戦闘経験を持つ者たちをずっと羨ましく思っていた」[41] とも述べている。これを単に「好戦的」と断定することは難しい。従軍中の様子を記録した『日記』を読むと分かるのだが，スティムソンは，この時期，中世の騎士を連想させるような純粋な忠誠心に満ち満ちているのである。

1917年９月，スティムソンは「陸軍を政治家の栄光をたたえる場所にすべきではない」と彼を実戦配置の待機リストからはずしたベーカー（Newton D. Baker）陸軍長官の執務室を訪れた。自分に政治的野心のないことを説明するためである。説明を受けたベーカー陸軍長官は，スティムソンの入隊を認めた[42]。

その後，スティムソンはロングアイランドのキャンプで訓練を受け，野戦砲兵隊第77師団第305連隊に配属された。1917年12月，ヨーロッパに向かう船上でクリスマスを祝った。結婚24年目を迎えたスティムソンが妻メイベルと離れて過ごす最初のクリスマスだったようである。ヨーロッパでの最初の１ヶ月は，英国軍の中での訓練の期間となった。1918年２月下旬から11週間の間，フランスのラングラス（Langras）に設けられた参謀養成所（the Staff School）の授業を受け，同年７月第77師団の実戦部隊に配属された。前線での体験は３週間ほどであったが，このわずかな期間において冷静な指揮官ぶりを発揮したようである。その後数ヶ月の軍務を経て12月９日除隊した[43]。

スティムソンは，１年半ほどの陸軍生活の中で，厳しい軍事訓練を受け，戦友と寝食をともにし，砲弾が飛び交う戦場を体験した。短い期間の体験ではあっても，この経験はその後のスティムソンの戦争観に確実に影響を与え，また妻への深い情愛を彼に再確認させた。以下，1917年12月19日から1918年７月31日の間に，入隊中のスティムソンがメイベルに宛てた多くの手紙（筆者注：多いときには週２回ほどの間隔）の中から数通をとりあげ，それらを部分的に引用しながら，彼が戦場で何を考えていたのかを考察したい[44]。

1918年２月26日付けの手紙の中で，スティムソンはラングラスでの参謀養成所の演習内容のほかに，高台にある古い要塞都市ラングラスと大聖堂の隣にある自身の宿舎の美しさをメイベルに伝えている。

君にこの街の風景と古い家具を備えた（宿舎の）インテリアを見せたい。しかし，自分が快適にここに座っているときも，前線では戦闘が繰り広げられている。我々の命を前線にいる兵士たちが命がけで守ってくれているのだ。私が今どのような思いでいるのか君ならば理解してくれると思う。

1918年３月17日付けの手紙では，水曜日と土曜日の授業と演習（map problem）が朝の８時から夕方の６時まで昼食時間もほとんど取れないまま続くと，彼にしては珍しく愚痴をこぼしつつ，以下のように続けている。

今週は嬉しい。君からの手紙が３通も届いた（筆者注：当時の戦場での混乱した郵便事情のため）。最高指令部と参謀の組織作りをわが国は今始めている。ドイツはこの分野で100年の歴史を持つのだ。我々は概念すらまだ掴んでいないのに。このギャップをどうやって埋めればいい？

1918年３月24日付けの手紙で，初めて実際の戦闘に言及している。

君に１週間手紙を書けなかった。初めてのことだね。激しい戦闘があったのだ。しかも６週間前に私がいた場所で（筆者注：スティムソンは参謀養成所の授業が始まる前のわずかな間，スイスとの国境に近い砲兵隊のキャンプで射撃訓練を受けた）。ヘイグ（Douglas Haig）卿が指揮する第51部隊がドイツ軍を撃退したらしい。ともに過ごした仲間のことが心配だ。死んだり負傷したりしてはいないか？君に詳しく話せないが，この戦場でのアメリカ兵の投入はさらに必要だ。もっともアメリカ軍（「ヤンキー兵」と呼ばれている）の（のべつ幕無く砲撃する）戦い方には課題もある。手紙にスミレの花を同封したよ。

1918年３月31日，復活祭の日の手紙である。

今日は復活祭。嵐のような雨降りの一日でとても寒い。連日のドイツ軍の攻撃に動揺している。でも英仏軍の士気は申し分ない。軍事訓練の賜物だろう。作戦計画に従って冷静に対応できる。アメリカ兵は大丈夫だろうか？６ヶ月早く訓練を始めていれば…ヨーロッパは本当に美しいが，生命力を感じない。ハイホールドの素朴な風景を思い出すよ。メイベル，君は今年の夏はそこで過ごしなさい。君のいるハイホールドを思い浮かべることにする。

1918年４月21日付けの手紙で，参謀養成所での親しい友人３名に言及し，彼らの進路（他の師団や情報部本部への配属）について説明している。

君の言うように，我々の（戦争）目的は正しい。だから我々はきっと勝つ。我々の前に続くまっすぐな道をただ進むだけだ。

1918年５月５日付けの手紙は，前週から不眠（筆者注：スティムソンの持病となっていく）に悩んでいることを告白している。

朝食後，友人のジョニー（Johnny Herr）のところに駆け込んだ。ジョニーは１月にホームシックに罹り，そのときは私が助けた。今回は逆だ。ジョニーは，車を借りてドライヴに連れ出してくれた。非難に値する無責任な行動だね。でもおかげで憂鬱気分が少し治ったよ。この１年間戦争について学ぶことに専念してきた。君の手紙が欲しい。君が元気でいることを確かめたい。

1918年５月15日付けの手紙，

結婚25周年のプレゼントを買ったよ。近日中に帰国するポーク（Polk，筆者注：ファーストネームが記されていない）少佐が君に届けてくれる。われわれはドイツに勝利できるだろう。アメリカの貢献は主に精力的な情報提供にある。

1918年５月19日付けの手紙は，参謀養成所の授業を終えて第86師団の前線に移動することを伝えている。

最新式射撃術を学べる連隊での体験は最良の価値をもつだろう。（上官の身の回りの世話をする）当番兵のジョンは，鉄兜を手に入れ，ガスマスクの装着の練習をしている。

1918年５月21日付けの手紙で，配属された前線での状況を説明している。

今回の前線は，（参謀養成所入所前に配属された）前回の前線とは全く違う。前回の前線は，ニューヨークにいるのと同じように安全な場所であったが，今回の場合は夜間に大砲が鳴り響いている。でもこれが強壮剤になって，憂鬱気分が吹き飛んだ。ここでは，平穏な場所が即座に戦場になり得る。私に適した場所だ。責任感を間違いなく養える。この世で最も価値のあることのひとつだ。男の仕事でこれ以上のものはない。

1918年５月26日付けの手紙は，前線での実戦から戻った直後に書かれている。

前線での体験は有意義だった。師団本部と砲兵部隊の両方での実戦の知識を得た。砲兵部隊では防空壕のようなところで眠ったよ。砲撃の様子も身近で観察できた。砲撃手は航

空機の操縦士からの報告を電話で聞きながら砲弾を打つ。敵の位置を正確に把握した上で攻撃するためだ。攻撃の合間に若い兵士の話を聞いた。彼の 6 歳の子どもにあてた手紙が地元の新聞に載ったそうだ。私が今まで読んだ中で最も感動的な手紙だ。新聞記事の写しを同封した。航空機が毎日撃墜され操縦士が死んでいる。何とかしなければ。

1918年 6 月 9 日付けの手紙は，パリから10〜15マイルほどの松林の中に設置された野戦砲兵隊第305連隊に移動して10日ほど経った様子を伝えている。

陸軍から連絡が入った。私は参謀（a chief of staff）の資格が得られそうだ。正規の職業軍人やウェストポイント出身者以外ではあまり例がないそうだ。誇りに思う。私は訓練された兵士として認められたのだ。またチョコレートを送って欲しい。食事はフランスの業者から取り寄せているが，恐ろしくまずい。また週 2 回は手紙を書くよ。もし受け取れなかったら，それは郵便事情のせいだ。

1918年 6 月15日付の手紙は， 5 月13日付けのメイベルの手紙を受け取ったという文章から始まっている。

君の様子が分かってとても嬉しい。パンチ（愛犬の名前）にも会いたい。周りの若い兵士たちはいつも良くしてくれる。このような恵まれた仲間の中でベストを尽くさない者がいるとしたら，相当な間抜け（chump）だろう。人生の中で最も強烈ですばらしい（the strongest and keenest）体験だ。この先，負傷あるいは死ぬようなことがあっても後悔はしない。

1918年 6 月28日付けの手紙，

ガスマスクの装着訓練は皆に不評だ。窒息しそうになるからだ。ガスマスクをつけると，他に何も出来なくなるが，手紙だけは書けそうだ。このコースでの訓練もそろそろ終わり。

『日記』には，このように「陸軍大佐」スティムソンの日々が素直に語られている。妻への濃やかな情愛に関しての余計な解説は不要であろう。子どものないスティムソン夫妻が，終生互いを掛け替えのない存在とみなしていたことはおそらく疑う余地のないことである。二人はとにかく四六時中一緒にいたがる夫妻であった。1917年の冬，入隊したスティムソンがヨーロッパに発つ際，メイベルは自分も連れていくよう夫を説得しようとしていたし[45]，スティムソンは，戦争終結や原爆投下などの諸決定に深く関わり多忙を極めた1945年の前半期においてさえ，極力メイベルと過ごす時間を作ろうとしていたのである[46]。

筆者が上記の「従軍日記」で注目したいのは，後年確認できるスティムソンの高度の国際政治

認識を，この時点ではほとんど見出せない点である。第一次世界大戦の前線にいたスティムソンを支配していたのは，敵を憎み，味方を愛する極めてシンプルな感情である。そして，ドイツと戦う英仏両国を素直に評価し，両国への協力を惜しまない一人のアメリカ人の心情をあらわにしている。伝統的な騎士道を思わせるような愛郷心も豊かに表現されている。この時点ではどちらかというと単純明快なスティムソンの国際政治認識は，1920年代の植民地政策，1930年代初めの軍縮交渉，そして第二次世界大戦における諸政策への関与を経て，広い視野と重層的な性格を備えるようになる。内外の複雑な政治状況を認識するにつれ，単純な愛国心に基づく外交が必ずしも国益につながるとは限らないことを十二分に理解したためではないか。このあたりは今後の研究テーマとなる。

V　結びにかえて

本稿では，20世紀初頭におけるアメリカの政治・外交とスティムソンの立場を分析した。本稿はまた，半世紀近いスティムソンの公職生活がアメリカの対外政策に与えた影響を考察する一連の研究の出発点にもなっている。両大戦間期におけるアメリカの重要な対外政策――中南米とフィリピンにおける帝国主義的政策と海軍軍縮条約の推進――と第二次大戦時の諸政策のすべてに主要な政策決定者として関与したスティムソンは，間違いなく現代アメリカの政治・外交の枠組みを形成した人物の一人である。スティムソンは，T.ローズヴェルト，ウィルソン，FDR，チャーチル，スターリンらと同じ時代を生き，ともに国際政治の枠組み作りに参加した。特に原爆の開発と投下決定において彼は中心的な役割を果たし，その意味において，スティムソンが核時代の方向を結果的には決定付けた（彼自身がどう考えていたかどうかは別として）点は重要である。このような問題意識を持ち，国際関係学の視点からアメリカの初期核政策を研究する筆者は，スティムソンの全生涯を考察しつつ同国の政治・外交を再検討する作業に着手した。

すでに述べたように，本稿は筆者のスティムソン研究において最も基礎的な部分を形成する。厳格な生活習慣，客観的で冷静な判断，職務に対する公平無私の姿勢，などがスティムソンに与えられる最も一般的な形容であろう。本稿ではまず，アングロサクソン系のピューリタン，富裕な中産階級，最高レベルの学歴，革新的な共和党の先輩政治家，といった環境あるいは要因で育まれたであろうスティムソンの価値観や人となりのようなものを考察した。この作業の中で，筆者は彼の「公職」への思いがことさら強かったことに気づいた。回顧録の中で表現されていたように，個人的な金儲けではなく「良い目的」のために働けることを知ったときに，「星」を見出したとスティムソンは感じていた。スティムソンの長い公職生活を「善良な仕事に就いていた日々」と単純化することは不可能であろうし，彼自身が第二次大戦中においては，自身の価値観と「公職者」としてのギャップに苦しんだことも事実である。しかし，政策決定に関わる際に自身の利害より，国家や国際関係というような「公」の利益の追求を常に心掛けた彼の姿勢は銘記すべきことと考える。

スティムソンの最初の公職である連邦検事（T.ローズヴェルト政権）および陸軍長官（タフト政権）の任務においては，「改革」あるいは「革新主義」がキーワードとなった。スティムソ

ンは，前例，秩序，資本主義経済，といったアメリカの伝統的な価値を擁護する典型的な保守派であった。同時に，植民地支配に対しては一定の距離を保ちながらも基本的には容認する立場をとった。自国に対して深い愛着をもち，公職に就いてからは国益を最優先させるという姿勢が，必然的に保守派としての特質を備えることになったのであろう。しかし，スティムソンの保守性は，変化や改革を拒む現状維持の姿勢とは無関係のものである。アメリカの伝統や規範を重要に思うからこそ，時代の変化に敏感に対応しようとする柔軟性を持っていたと言うべきかもしれない。規律のない資本主義経済の増長は，結果的には資本主義全体を蝕むと判断したからこそ，スティムソンは，「トラストバスター」[47] と呼ばれるほどに，T. ローズヴェルトの改革路線の補佐役に徹したのである。また，ヨーロッパ列強の膨張政策に対抗するために陸軍の改革が不可欠であると判断すれば，すでに検証したように，彼はほとんど手段を選ばなかった。「革新的な保守」とも言うべき彼のスタンスは，基本的には生涯変わらなかったように思う。スティムソンは，第二次大戦の末期から戦争終結直後の時期において，FDRやトルーマンに核の国際管理に向けての交渉を早急にソ連と開始せよと進言した[48]。冷戦状況がすでに進展していた当時の状況にあって，「革新」的どころか「革命」的にも聞こえる提案であるが，スティムソンからすれば，至極当然の「保守的」な提案であったに違いない。彼は，核時代においては，国際管理という方法でしか自国の安全を現実的に守れないと判断したのである。

本稿ではまた，「従軍日記」が明らかにした第一次大戦中のスティムソンの戦争観に言及した。この時代の素朴なまでの彼の戦争観は，すでに述べたように，その後の嵐のような政治状況の中で揉まれに揉まれていくことになる。第一次大戦の戦場においては，勇敢に敵国を打ち破ることが愛する者と自国を守ることにつながると信じたスティムソンが，軍事力に訴える外交が安全をもたらすとは限らないということを，複雑な国際環境の中で学習していくのである。このあたりも今後の研究におけるテーマになっていく。

注

1）1898年に勃発したスペインとの戦争をアメリカの対外膨張政策の出発点とする見方が，国際関係学およびアメリカ史において一般的である。アメリカ学会訳編『原典アメリカ史』第5巻，岩波書店，1957年，3-4ページ。

2）Godfrey Hodgson, *The Colonel: The Life and Wars of Henry Stimson, 1867-1950*, New York, 1990, pp.60-61.

3）スティムソンの「弟子たち」に焦点を当てた研究としては，Walter Isaacson, *The Wise Men: Six Friends and the World They Made*, New York, 1986.

4）正式には，President Truman's Message to the Congress, 12 March 1947. 1947年3月に，トルーマン大統領が打ち出した反共政策。ギリシアおよびトルコに対して4億ドルの援助を開始し，同地域の共産主義化を防ごうとしたもの。全文は，*Department of State Bulletin*, 23 March 1947, pp.534-7.

5）1947年6月にマーシャル（George Marshall）国務長官がハーヴァード大学での演説という形で発表した欧州援助計画。戦争で疲弊したヨーロッパ諸国に対する経済援助計画であったが，同プランを受け入れる国（西側）と受け入れない国（東側）という形で，ヨーロッパンを分断する結果を招いた。同長官の演説の全文は，*Department of State Bulletin*, 15 June 1947, pp.1159-60.

6）*Henry Lewis. Stimson Diaries (microfilm edition), Manuscripts and Archives*, Yale University Library.（以下，『HLS日記』と記す）。
7）Henry L. Stimson and McGeorge Bundy, *On Active Service in Peace and War*, New York, 1948.
8）Sean L. Malloy, Atomic Tragedy: *Henry L. Stimson and the Decision to Use the Bomb against Japan*, New York (Cornell University Press), 2008.
9）Hodgson, *op.cit.*
10）原爆投下決定の研究におけるバーンスタインの業績に関しては，中沢志保「原爆投下決定における『公式解釈』の形成とヘンリー・スティムソン」『人文・社会科学研究』第15集，文化女子大学，2007年，51-63ページ。
11）中沢志保「『スティムソン文書――アメリカの初期核政策との関連で――』『人文・社会科学研究』第16集，文化女子大学，2008年，173-182ページ。
12）本稿第二節が依拠する文献は以下の通り。*Guide to a Microfilm Edition of the Papers of Henry L. Stimson in the Yale University Library*, Yale University Library, New Haven, 1973, pp.1-9; Stimson and Bundy, *op.cit.*, pp.xi-xxii. なお，直接引用する場合はそのつど明示する。
13）Stimson and Bundy, *op.cit.*, p.xi.
14）Hodgson, *op.cit.*, p.29.
15）前掲のアイザクソンが指摘するように，アメリカの政策決定において，エリート私立高校，スカル・アンド・ボーンズのような有名大学の秘密クラブ，ウォールストリートの会議室，ワシントンのディナーパーティー，といった特殊な場所でつながった小グループがときに大きな影響力を持つ。Isaacson, *op.cit.*, p. 25.
16）Stimson and Bundy, *op.cit.*, pp.16-17.
17）T.ローズヴェルトの強硬な対中米政策の典型。米西戦争後アメリカはスペインから独立を果たしたキューバに干渉し，1901年同国の憲法の中に，アメリカのキューバへの干渉や海軍基地の建設などを認めさせる修正条項（プラット修正条項）を挿入させることに成功した。アメリカによるキューバの保護国化は，1930年代まで続く。前掲『原典アメリカ史』210-212ページ。
18）T.ローズヴェルトは，1880年代にダコタ州の荒地を旅して以来たびたび西部に出かけている。スティムソンも，イェール大学の学生時代に西部を旅し，そこで先住民の反乱を目撃している。またロッキー山脈での山登りや狩猟といった趣味をこの頃から身につけた。Malloy, *op.cit.*, pp.19-20.
19）広大な敷地に設けられたこの別荘は，極度の緊張感に見舞われたスティムソンが逃げ込むオアシス的な場所であった。公職についている間も，金曜の夕方から月曜の早朝まで，妻とマックロイのようなごく身近な側近たちともに過ごすことが多かった。感謝祭の日に近隣の住民を招待する行事も1920年代まで続き，この招待客の中にT.ローズヴェルトもいた。『HLS日記』で再三登場する場所である。この別荘地に関しては以下の文献が詳しい。David F. Schmitz, *Henry L. Stimson: The First Wise Man*, Wilmington, 2001, pp.8-10, 80, 85, 144, 169, 203, 208.
20）後進国型の帝国主義の立場に立つアメリカが主に中南米諸国に対してとった軍事力を背景とした強硬な外交。前掲『原典アメリカ史』6-10ページ。
21）同上書，129ページ。
22）Malloy, *op.cit.*, pp.22-26.
23）連邦検事時代に関する記述が依拠する文献は以下の通り。Stimson and Bundy, *op.cit.*, pp.3-17; Malloy, *op.cit.*, pp.20-21; Hodgson, *op.cit.*, 58-70. なお，直接引用する場合は，そのつど明示する。
24）「ノーザン・セキュリティーズ」は財界巨頭のモーガンが鉄道会社と提携して作った会社，独占企業体の典型である。『原典アメリカ史』47-48ページ。
25）Stimson and Bundy, *op.cit.*, p.3.
26）*Ibid.*, p.16.
27）陸軍改革に関する記述が依拠する文献は以下の通り。『HLS日記』Reel 1, Vol.2, pp.1-118; Stimson and Bundy, *op.cit.*, pp.28-40; Malloy, *op.cit.*, p.27; Hodgson, *op.cit.*, pp.73-78.
28）『HLS日記』Reel 1, Vol.2, p,67.

29）Stimson and Bundy, *op.cit.*, p.38.
30）アメリカ合衆国憲法修正第２条は以下のような規定である。
　A well regulated Militia, being necessary to the security of a free State, the right of the people to keep and bear Arms, shall not be infringed.
　同条を「武器の所有と携帯を市民の権利として保証する」ものとする見方は，条文の後半のみを注目した場合の解釈である。同条の成立背景を理解した上で条文全体を解釈すれば，「連邦政府に対して州が独自の民兵組織を持てる権利」を規定したものと解釈するのが一般的であろう。このあたりに関しては，以下の文献を参照のこと。小熊英二『市民と武装――アメリカ合衆国における戦争と銃規制――』慶應義塾大学出版会，2004年，10-14ページ。
31）Stimson and Bundy, *op.cit.*, p.39.
32）マーク・トウェインの小説名（*The Gilded Age*）に由来する呼称。
33）19世紀末～20世紀初頭にかけてのアメリカの対中政策は，日本やヨーロッパ列強のそれとは異なり，領土の分割には参加せず通商を重視するものであった。マッキンレー政権下で国務長官を務めたヘイ（John Hay）が発表した1899年および1900年の対中外交方針は，門戸開放政策を明確にしたものであった。『原典アメリカ史』143-155ページ。
34）1912年の大統領選挙は，タフト共和党候補，Ｔ．ローズヴェルト革新党候補（共和党の指名争いでタフトに敗れ，脱党した上で新党を結党した），ウィルソン民主党候補，の大物３者が争う異例の展開となった。タフト政権下で陸軍長官を務めていたスティムソンは，タフトとＴ．ローズヴェルトの両候補の間で板ばさみとなり，消極的にタフト支持にまわったスティムソンとＴ．ローズヴェルトはこの後しばらく絶交状態になった。スティムソンは共和党が分裂することを憂い，「いっそ二人とも（Ｔ．ローズヴェルトとタフト）指名されなければいいのに」と感想を日記に残している。『HLS日記』Reel 1, Vol.2, pp.70-88; Stimson and Bundy, *op.cit.*, pp.48-55.
35）この時期のスティムソンの立場に関しては，Stimson and Bundy, *op.cit.*, pp.82-86.
36）全文は，*Foreign Relations of the United States*, 1917, Supplement 1, pp.195-203.
37）1917年以降のスティムソンの発言等に関しては，Stimson and Bundy, *op.cit.*, pp.86-90.
38）一例を挙げれば，ブッシュ（George W. Bush）政権のライス（Condoleezza Rice）国務長官は，外交専門誌で「中東政策において，特にアフガニスタンとイラクにおいて，自由と民主主義の概念（に基づくアメリカの対応）だけが正義と安定をもたらすことが出来ると認識している」と明言する。Condoleezza Rice, "Rethinking the National Interest: American Realism for a New World," *Foreign Affairs*, July/August 2008, p.3.
39）Malloy, *op.cit.*, p.28.
40）Stimson and Bundy, *op.cit.*, pp.91-92.
41）*Ibid.*
42）*Ibid.*, pp.93-94.
43）*Ibid.*, pp.94-100.
44）『HLS日記』Reel 1, Vol.4.
45）Stimson and Bundy, *op.cit.*, pp.95-96.
46）一例を挙げる。スティムソンは，1945年４月６日～11日分の日記をまとめて書いている。「忙しい１週間で日々日記を書く（正確には書き取らせる）時間が取れなかった。でも週末のわずかな時間をメイベルと一緒にいたくて，ハイホールドで過ごすことにした」『HLS日記』Reel 9.
47）Malloy, *op.cit.*, p.21.
48）1945年３月におけるFDRとの会談，同年４月ならびに９月におけるトルーマン大統領への進言，といった形でスティムソンは核国際管理構想と提示していた。これらの詳細に関しては，中沢，前掲論文「原爆投下決定における『公式解釈』の形成とヘンリー・スティムソン」。